

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

インド北東部アパタニ族フィールドノート ミヨ ウコウ祭を中心として

著者	鈴木 正崇
著者別名	SUZUKI Masataka
雑誌名	白山人類学
巻	23
ページ	267-288
発行年	2020-03
URL	http://doi.org/10.34428/00011622

インド北東部アパタニ族フィールドノート — ミョウコウ祭を中心として —

鈴木 正 崇*

Fieldnotes on Apatani People in Northeast India: With Special Reference to the Myoko Festival

SUZUKI Masataka*

1 概要

インドの北東部、アルナーチャル・プラデーシュ州 (Arunachal Pradesh) に居住するアパタニ族 (Apatani) の集住地ジイロ (Ziro) に、2019年3月に5日間滞在し、年間最大のミョウコウ祭 (Myoko) に参加した¹⁾。以下はその時の記録である。ただし、ミョウコウ祭は1ヶ月続く祭なので、本報告はそのうちの一部に過ぎない。

アパタニ族の人口は、1981年の統計では16580人、2011年の統計では42352人であった。インドでは制度上はST (Scheduled Tribe) の指定を受けている。言語はシナ・チベット語族で、形質はモンゴロイド系である。民族名称は神話的祖先であるアボ・タニ (Abo Tani) に由来する。アパやアボは父や祖父の意味で、現在も自称はタニである。北方のウプヨ・スプン (Uppy Supung. 一説には Üppy Lembyañ, Mudu Baru) が故地で、移動して野生の爬虫類 (buru) がいる土地を呪力のある金属板 (myamya talo) を使って打ち負かして定着したという [Bower 1953:28-38]。現在はジイロ盆地と隣接する町のハポリ (Hapoli) に居住する。1950年代にジイロ盆地の北にヘリコプター基地 (その後に飛行場) が作られて、その周辺に Old Ziro が形成され、現在も5000人が居住して市場がある。ハポリは盆地の南に1960年代に作られた町で、下スパンシリ県 (Lower Subansiri district) の県庁である。

人類学者の間では、アパタニ族は、1944年にイギリス植民地政府の行政官としてこの地を調査した、C. フォン・フューラー・ハイメンドルフ (1909-1995) の詳細な民族誌 [Fürer-

* 慶應義塾大学; Keio University, 2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo, 108-8345 / balangoda.1980-sripada@z2.keio.jp

1) アパタニ族への訪問は、「ヒマラヤの蛮族」[フューラー・ハイメンドルフ 1970] の面白さに惹かれたことが大きい。インド北東部への訪問は、ナガランド (2003年) とアッサムのマジユリ島 (2008年) に続いて三回目であった。

Haimendorf 1956, 1962, 1980] でよく知られている。集住地のジイロは標高 1688 m から 2436 m の高原に位置し、中央は盆地で周囲を森に囲まれ、クレイ川 (Kley) とその支流が流れ込む肥沃な土地で生産力が高い。水に恵まれて水稻耕作が盛んで、野菜や芋も豊富に採れ、各地に養魚場が発達し、魚も日常食である。家畜は牛、馬、ミトゥン牛、鶏を飼育する。ヒマラヤ山脈とアッサム平原の中間地にあつて交易も盛んであつた。近年はアパタニ族の村にも観光化の波が押し寄せてきたが、アルナーチャル・プラデーシュ州が観光を解禁したのは 1992 年で 27 年前である。この地域は、現在でも中国との国境問題が未解決で、中国の地図はアルナーチャルのほぼ全域を自国の領土として表示し、紛争地域であることから、アッサム州との境界はインナーラインとしてアルナーチャルへの入境には外国人・国内居住者を問わず、特別な許可書が必要である²⁾。それでも、観光客を限定的に受け入れるようになり、宿泊施設として、ジイロでは 2010 年代からホームステイが発足し、ヌグヌ・ズィロ (Ngunu Ziro) と Rural Tourism Management Committee が管理し、現在は村での登録数は 14 軒である。西欧の人々を中心に、夏は昆虫や蝶々の蒐集、春から秋はトレッキングなどで訪問する観光客が増加しつつある。但し、観光客の大半はインドの国内居住者である。インド政府は、ジイロの生態系を維持するシステムを「文化的景観」として、ユネスコの世界遺産の「暫定リスト」に載せている。近い将来、急速に変貌する可能性がある。

2011 年からはトライブ (tribe) の伝統文化とは全く関係のない野外ロックコンサートが開催されるようになり、毎年 9 月に 4 日間の日程で行われ、2016 年には外国人は 40 人、インド人は 6000 人が参加したという。風光明媚な農村は都会人にとっては魅力的である。この時はテント村が出現するという。ただし、この州の観光は、インド人のツーリスト向けである。外国人にとっては鼻栓と入れ墨と装飾品を身に付け伝統的衣装を纏う女性がお目当てで、観光資源になっている。現在のアパタニの女性は写真撮影に抵抗はなくなっているようであるが、観光の目玉にされることは問題である。今後の観光の行方は流動的である。

2 日常生活

アパタニ族は、竹製のベランダ付きの高床式住居に住んでいる。家の前にはアギャンと呼ばれる竹で編んだ魔除けが置かれていて、儀礼を行った祭壇が残る。住居の屋根は大半がニッパヤシからトタンに変わり伝統的な村落景観は失われた。民族衣装は着る人が減少し、日常

2) マクマホン・ラインは、1914 年 3 月、イギリス、中国、チベットによるシムラ会議で、イギリス全権マクマホン (Sir Arther Henry MacMahon) とチベット全権との間で結ばれたインド北東部とチベット間の境界線で、中国はチベットは属国と主張して正式の署名調印を拒否した。インド側はその後も国境線と主張したが、中国は認めず、1962 年には中国は軍隊を派遣して南下し中印国境紛争に拡大した。1987 年 2 月 20 日、インドはアルナーチャル・プラデーシュ州を正式に設置した。しかし、中国は現在もマクマホン・ラインと新しい州を承認していない。

に着ているのは老年の女性が多い。男性は胸の周囲に赤い竹製の巻物をつけ、かつては後方に長いふさふさした毛の尻尾をつけていた。頭の髪の毛は長く伸ばし、額の上に髻 (piiding) を結び、顎に入れ墨 (tiippe) をしていた。女性は赤い筒型の刺し子を着ていたが、現在は少なくなったという。女性の場合は身体加工が顕著にみられ、初潮を迎えると、額と顎に入れ墨を施し、左右の鼻に開けた穴に黒い木の鼻栓 (yapinhulo) をして³⁾、重いビーズの首飾りをつけた (写真 1)。鼻栓の習俗は 1973 年に禁止され、現在では入れ墨と鼻栓は 60 歳以上の高齢者に限られる。女性が入れ墨と鼻栓を施す理由は、他の部族による略奪を回避するために顔を醜く見せると解説する文献があるが、間違いだと現地の人はいう。老婆に聞いた話では、顔を美しく見せるための伝統的な装飾で、入れ墨と鼻栓に誇りを持って生きてきたという。美意識が我々とは全く異なる。実際に見慣れてくると独自の美しさを感じられるようになる。鼻栓はやめても入れ墨はしばらく継続し、現在の中年の女性の多くは入れ墨を入れている。アパタニ族は教育水準も高く、女性の外見を見ただけで、未開・野蛮として判断することはできない。



写真 1 女性の入れ墨と鼻栓

出典：筆者撮影

3 村落

アパタニ族の年間最大の祭であるミョウコウは春祭で、元々は梅の花が咲く頃に始めたという。1ヶ月間にわたって続く。現在は西暦の 3 月 20 日から 4 月 20 日までと日程を固定している。祭の目的は、祖先 (kalo) を祀り、豚・ニワトリ・犬を供犠して捧げ、豊作祈願、健康祈願をする。各集落の人々が賑やかに交流する社交の場でもある。

ジイロの村 (lemba) は 9 つから構成され、名称は「東側」はハリ (Hari)、カルン (Kalung)、タジャン (Tajang)、ルル (Reru)、「西側」はヒジャ (Hija)、ドウッタ (Dutta)、ムダン・タゲ (Mudang-Tage)、ミチ・バミン (Michi-Bamin)、「南側」はホン (Hong) のみであ

3) 鼻栓は、籐や竹から作った炭で作る。木を燃やして炭を作り、炭を硬く滑らかな板にこすり付け、表面のでこぼこを無くす。皮膚を傷つけたり雑菌が傷口から入らないようにする。鼻栓は洗顔時や就寝中も外さず、古くなると夫が木を山から切り出して新たに作る。

る⁴⁾。最も古くて大きいのはホンで800戸4000人、最も小さい村はミチ・バミンで1000人である。

ミョウコウ祭を行う場合は3つの地区に分けて分担する。その内訳は、①「東側」のハリ、カルン、タジャン、ルルの4村から構成されるタルヤン・ハオとレヌ・タジャン (Talyang-Hao, Reru Tajang), ②「西側」のヒジャ、ドゥッタ、ムダン・タゲ、ミチ・バミンの4村から構成されるトゥン・ドゥボとデュレ・ヒジャ (Tün-Dübo/Tünü-Dibo, Düre Hija), ③「南側」のホンの1村から構成されるヌチ・ヌトゥ (Nüchü-Nütü/Nichi-Niü) である。地区名は先祖の聖なる名称に由来し、それぞれの子孫の村という意味である。ミョウコウ祭は、毎年、三つの地区が交代で当番を務めて開催する。当番の順番は、東側→西側→南側と反時計廻りで、3年に一度当番が巡ってくる。2019年は南側のホン村の担当であった。ここは最も



写真2 祭で建てる柱ボボと集会場のラパン
出典：筆者撮影

人口が多いので、1村落＝1地区となっている。集落には祖先を同じくする父系血縁集団のクラン (clan 氏族) が複数あり⁵⁾、クランごとにラパン (lapang) という石の土台の上に板が渡された集会場がある。元々は木造で毎年新しく作り直していたが、現在は石作りの恒久的なものに変わった。昔は最も大きな木を選んで斧で切り倒した。かなり危険な作業だったという。この作業は11月から始まり、1月の第1週までには村の中央のラパンを完成させる(写真2)。ラパンを支える柱トゥリ (tuli) は、タンモ (tammo) やキラ (kira) の木のみを使用し、村のメンバーが寄贈する。一連の作業は、ラパン・ボヌン (Lapanñ Bonüñ) という。樹木信仰が生きている。

4) 「東側」はハリ (Hari) とベラ (Bela) の2村で、ベラが3つに分割された。元は全体が7村だった。「東側」のタジャンが拡大してレンピャ (Lempya) が1972年に成立した。

5) アパタニは上位の有力者と平民の二つの族外婚集団、ミト (mith) とモラ (mora) がある (ハイメンドルフは guth と guthi [Fürer-Haimendorf 1980: 158-159])。モラの内部構成は父系クランのハル (halu)、族外婚の単位でサブ・クランのトゥル (tulu)、更に下部のウル (uru) に分かれる。

4 祭の準備

ラパンの脇には、ナゴ (nago) という竹で作った小屋の祭場をつくる。ここにシュキ (Sükki, Siki) と呼ばれる神霊を招いてミョウコウ祭の間祀る。シュキは祭の中心となる神霊である。内部の柱には前年に捕獲して供犠した猿、シビ (sübi, siibi) の頭蓋骨を掛けて、ニワトリと卵を供物として捧げておく。猿は米の収穫後の 10 月か 11 月頃に集落の男性が家人、特に妻に知られないように秘密で森に狩猟に行き行って捕まえる。この行事はブディン・ラヌン (būdiñ lanüñ) と称する。猿を竹の枝 (tapir) に括り付けて担いで帰るのは長老の役目である。村に帰ると狩猟した人々は村中をホッ、ホッと叫びながら回る。猿は通常はシビというが、儀礼の猿はビディ (biedü, būdiñ) と呼ばれる。猿は祭文の中ではスキイ (ski) という。儀礼の場合は、19 日目と 20 日目の名称では猿はビディである。猿は特別な奉納物とされている⁶⁾。2019 年の祭を主宰したホン村のナゴには、猿の頭蓋骨はなかった。2018 年の祭を行ったミチ・バミン集落のナゴには頭蓋骨がそのまま残っていた。祭の終了後もそのままにして置く。祭の執行はニブ (nyibu) と呼ばれる祭司が行う⁷⁾。ニブが祭の時に、竹の茎を頭蓋骨に入ると回り出し、呪文を唱えると止まるといふ。猿の供犠は、かつての人身供犠の名残りと説明する人もいふ。

ミョウコウ祭の開始に先立って、ラパンの前にはボボ (bobo) という T 字型の柱を建て、神霊のウィ (uis, wi) を招く。柱の上部には萱で作った旗をつける。ラパン・ボヌン (lapanñ bonüñ) という。ボボの木は各クランの人々が共同作業で森で木を切り倒して引いてくる。1970 年代までは柱からボハ・ベヌ (boha benü) という蔦を柱の上部からラパン



写真 3 祭司ニブ

出典：筆者撮影

6) 猿の供犠の由来は以下の通りである。昔、祖先のアポタニ (Apotani) とアト・シュキ (Biedü Sükii, アポタニの義父) が狩猟で争った時、シュキが崖から滑落して峡谷に落ち、タニはミョウコウ祭は中止と判断した。しかし、タニはミトゥン牛を供犠したので、シュキは祭への参加を承諾した。ただし、毎回のミョウコウ祭でミトゥン牛を供犠すると損失が大きいので、猿と豚とニワトリの供犠を行うことになったのだという。

7) 現地では英語でシャーマン (shaman) と説明するが、実際の機能は祭司 (priest) である。神がかりは常態でない。ニブや祭文に関しては、[Blackburn 2010] に詳細である。

までかけ渡して、若者が薦を伝って登って、降りる時は宙返りをするなどアクロバチックな動きを演じたが、柱にする太い木が無くなり折れる危険性が生じたので現在は中止されている。青年の能力誇示と共に、神霊を迎える意味もあった。

クランごとに祭司のニブが祭を執行する。ニブは独特の綺麗な刺繍を施した上着 (zilang) を纏い、宝貝やビーズ玉などの装飾品を身に付けて、真鍮の杖を突く。頭には髻を結う (写真 3)。祭の進行や運営の全体は、クランの代表者会議のブルヤン (bulyañ, buliang) が行う。三つに分かれて村落会議の機能を果たす。長老のアカ (aka) ブルヤン、意思決定機構のヤパ (yapa) ブルヤン、若者のアジャン (ajang) ブルヤンの三つから構成される。政府が任命する行政官のガンプラ (gaonbura) は村人と上部機関との間に立つ。

5 ミョウコウ祭の初まり

ミョウコウ祭の初日は3月20日のサマ・ピヌン (Sama-Pinüñ, 別名 Sama Manü) である⁸⁾。この日の夜、クランごとにある屋外の開花した梅 (takung apu) の樹下の祭場のユグヤン (yugyañ) で、ニブが3時間から4時間ほど祭文を唱えて、世界の創造、生物の生成を語る。神霊の Dewb, Raru, Kiiri, Kilo, Siki などが招かれて祭で人々と交流する。アロ・アットウ (alo atto) と呼ばれる祭の当番の家の中には聖なる木 (sampe yasang) を割って同じ大きさにして井桁状に組んだサマ (sama) を隅に造って、クランの祭壇とし、ニワトリを捧げて神霊を祀る。ミジ・ピンタ (miji pinta) というヒョウタンの壺も蒸留酒で満たされて捧げられる。

2日目は3月21日で、この日はクボ・アジン (Khübo Ajiñ), あるいはアマン・ギョヌン (Amang-Gyonüñ) と呼ばれる。ニブに率いられた子供たちの行列が伝統的な衣装を身に付けて、客人の村から出て迎える側の村の家に向かうことである。夜にはおもてなしをする。クボ・アジンは迎えられた家、ルッチャ (rücha) で、歌合戦のアユウ (ayyu) を行う。別れる時はリュロ (rülo) という。儀礼的訪問が終わると、他の家々でも訪問客と主人側の交流が行われる。これをオ・タンテ・ヌン (o tante nüñ) といい、3日間の交歓が続く。

祭の3日目の3月22日は、スロ・チヌン (Süro-Chinüñ, Swro-Chenwin), あるいはタパル・ルヌ (Taper Lünü) という。ズィロに到着したのはこの日である。午後2時から祭が始まった。この日はミョウコウ祭の中心となる神霊、シュキ (Sükki) を祀る。各クランの盛装した指導者が自分たちのラパンの前に集まり、クランの成員が集まると、成員を率いて行列 (penii) を組み村の中を笹の葉 (taper) を手に持ってホウホウと叫びながら回る (写真 4)。参加者は全て男性である。歩く領域や道筋は決まっていて、複数のクランの集団が相互に交錯しながら村内を巡る。最後はクランのラパンの近くにあるナゴの小屋にやってくる。

8) ミョウコウ祭の記述は [Apunigyabyo Generation Society ed. 2019] と [Mihing Kaning 2008] を参考に行っている。



写真 4 クランの長が先頭に立って笹の葉を振る

出典：筆者撮影



写真 5 祭壇ナゴの周囲を巡る

出典：筆者撮影

神霊のシュキが降りると、クランの指導者の笹の葉が自然に揺れ出す。神霊のシュキがきたとして、人々は一斉に笹の葉をナゴの中に納める（写真 5）。最後は猿の頭蓋骨に括りつける。ナゴの前では、呪文を唱えて、口の中に酒を含み、笹の葉に吹きかけて興奮状態になる人もいる。午後の行事はこれで終了する。ホン村にある古い 21 のクランの全てが参加する⁹⁾。

この日の夜は、村人は親戚の家々を次々に訪問し、肉と卵を肴にして、米の濁酒や雑穀と米で作った蒸留酒のアラ（alla）を痛飲する。蒸留酒は米だけでなく稗や玉蜀黍を入れて作るが、英語ではライス・ビール（rice beer）と表現する。もてなしには必ず塩（tapyo）がでる。塩は貴重品で茶色の塊で出される。塩の作り方は、塩分を含む植物を 2 日間乾燥させて焼き、灰にして塩分を取り出す。ハイメンドルフが 1944 年に訪問した時には、塩が貴重な支払い手段として使われていたことを報告しており、チベットの岩塩とは異なる別の塩がこの地では流通していた。かつては、この日の晩には、敵を襲撃する戦闘の踊りのロピ（ropi）を行っていたが、現在は家ごとに歌を楽しむだけになっている。

6 ミョウコウ祭の展開

ミョウコウ祭の 4 日目の 3 月 23 日は、早朝に祖先を祀る。この日はピンヤン・フヌン（Piñyañ-Hunün）または、ユグヤン・トゥヌン（Yugyañ-Tonün, Todu）と呼ばれている。トゥヌンは供犠のことである。村の中には、クランごとの祭場がユグヤン（yugyañ）で梅の木が生えている（写真 6）。梅の木の下に井桁状に組んだ竹の祭壇（sama）を作り梅の木にはニワトリ（rubu paro）や犬など供犠獣を結び付け、雑穀と米の蒸留酒（alla）が入ったヒョウタンの壺（yaju）と聖樹の葉を入れた籠を置く。夜明け前の午前 5 時過ぎに、供犠の豚（rubu alyi）を提供する家から、若者が豚の足を天秤棒に結び付けて担って、ユグヤンの祭場に持

9) 古いクランは、Bullo, Budi, Bulyu, Lage-Hache, Hibu, Kani, Kago, Mudang, Nami, Neha, Naru, Penje, Punyo, Padu, Takhe, Tallo, Tapi, Talling, Tiinyo, Tahu, Tabinである。



写真6 クランの祭場ユグヤン

出典：筆者撮影



写真7 供儀の豚を提供した家の女性たち

出典：筆者撮影

ち込み、大地の上に降ろす。祭司ニブ（nyibu）が儀礼用の宝貝の装飾を施した服をきて、腰に刀を下げて登場し、祭壇の前で長い祭文を朗誦する。この儀礼はアルイ・スプン（Alyi Supun）という。内容は人類の始まり、特にアパタニの祖先についての語りで、祖先を招いて豊作や健康を祈願する。供儀する豚の所有者は伝統的な衣装で盛装して参加する。この儀礼への参加は父系クランの上位有力者ミト（mith）に限られ、他の部族と結婚した従属民や平民の男性のムラ（mura）は参加できない。ユグヤンの儀礼への参加は自らの社会的立場を誇示する機会となる。ニブの祭文の朗誦は1時間近く続き、夜が白々と明けてくる。終了後は、豚は一足先に所有者の家に持って帰る。

しばらくたつと、村の女性たちが背中に青と赤の刺繍が入った白布をまとい、青と赤のスカートをはき、沢山のビーズの首飾りをつけ、雑穀と米の蒸留酒が入ったヒョウタン容器と、米の粉の入った籠を提げて登場する（写真7）。供儀用の豚を提供した男の妻や、家族の長男の嫁たちである。サブ・クランの数が多いと供儀をする豚の頭数も増えるので、女性の参加者も多くなる。祭司の指示で、女性たちは蒸留酒と白い米の粉を、供儀される豚・ニワトリ・犬に振りかける（写真8）。米の粉を振りかけるのは女性の役割で、供儀の前に清める意味があるという。老婆たちは米の粉を梅の木に擦りつけて丁寧に撫でまわす。まるで木の成長を祈るかのようにする。終了後、女性たちが村の通りに出てくると、各家のベランダやその前で家族の人々が待ち構えていて蒸留酒と米の粉を振舞う。酒と米が行き渡り、祭の願いを共有する。

祭場ではニブが祈願をして祖先のための供



写真8 女性が米の粉と酒を豚に注ぐ

出典：筆者撮影

儀が始まる。ニワトリを供儀し、祭壇や木に羽や血をなすりつけ、肝臓を取り出してその形で占いをして、祖先が供儀に満足しているかどうかを見る。祖先に供えた生卵も殻を割って形状で占いをする。ニワトリだけでなく犬も合わせて供儀する。祭場のユグヤンでの一連の儀礼はこれで終了する。

豚は祭場では供儀せずに、提供者の家に持ち帰り、家族は祭司のニブが来るのを待つ。ニブが家を訪問して、通常の囲炉裏 (ago) の奥にある聖なる囲炉裏 (ura) の傍らに座り、豚を前に置いて供儀の由来を説く祭文や唱え言を行う。聖なる囲炉裏は奥の方に位置していて通常の煮炊きはしない。儀礼が終了すると、豚は裏側のベランダに運び出されて、供儀が執行される。解体する人は、占いで特別に選ばれた若者で、手早く部位に分けていく。胸・足・腹などの部位は、血縁者や親族とのつながりの遠近に合わせて分配する。男性と女性の間でもらう部位が決まっている。頭は父系親族の最長老にあげる決まりである。胸の部分は家に保管して燻製のベーコン肉、ヨ・アソ (yoh aso) にして長期保存し、お祝いや儀礼の機会に応じて少しずつ切り取って贈与品として分け与える。相互交流による儀礼的友好関係をアパタニでは、ブヌ・アジン (bunü-ajing, buniin, gyotii, pinyang) といい、贈与交換やもてなしを通して友好を深めることを意味する。贈与はブヌ・アジン (友好関係) の証である。豚の血も分けて飲む。ただし、父系クランの上位の有力者ミト (mith) は、平民のムラ (mura) の人々が供儀した豚の血は飲まず、逆も同様で、この決まりを破ると死ぬと言われる。供儀に際して大事なのは豚の心臓をとることで、土製の壺に入れて秘密の場所に保管し、祭の 7 日目、3 月 26 日に祭司がきて開封し煮詰めて塊にして御飯に混ぜて共食する。この時には最も古い友人 (kazi punyu nyuin) にベーコン肉を贈与する。

祭司と供儀をする若者は、豚を提供した家を次々と廻って、各家で供儀を執行する。夕方までかかる 1 日がかりの仕事である。豚を供儀した若者は、ミョウコウ祭の間は、ダール、大豆、南瓜、芋、トマトなど外来の食物を食べてはいけないという禁忌を守る。神聖な任務なので食べ物はアパタニ族の伝統的な生活に由来するもののみを食べる。一般の人々も、祭の間は、芋や野菜は食わず、ひたすら肉を食べ続ける。この日は、各家には親戚 (asso) の関係にある親族や遠方からの客人が訪問し、豚肉と卵と酒と塩でもてなされて友好を深める。美味しいミトゥン牛の肉も供される。主として儀礼食として食べられる。

5 日目の 3 月 24 日には西側の集落、6 日目の 3 月 25 日には東側の集落から客人がやってくる。ホン村の人々は、翌年は東側の集落でもてなされることになる。農作業が始まる前の春のミョウコウ祭は儀礼的な富の蕩尽の機会であり、勲功祭宴 (feast of merit) とでも呼ぶべき行事である。他の山地民にも同様の習俗が残っている¹⁰⁾。

10) 東部山地に住むナガ族は巨石を運ぶ祭礼を行い、アンガミではキケと呼ばれる印が屋根に付けられて誇りを顕示し勲功祭宴の様相がある [鈴木 2004: 63-64]。

7 葬制

アパタニ族の各村の外れには墓地がある。一般の男性の墓 (biyu) は、竹で三角形の櫓をたて、ミトゥン牛 (mithun, 雌は subu, 雄は sudo) を供犠して頭蓋骨を中央に縛りつける (写真 9)。死者は土葬にして弔い死者の国 (neli) に送る。ミトゥン牛はこの地域で最も神聖とされる動物で、肉は美味で、売買する時も成牛 (10 歳～11 歳) は 70000 ルピーと高価である。女性の墓は竹の棒を一本立てるだけの簡素なもので、男性と女性の社会的地位の差異が現れる。水死者や交通事故死などの異常死者の場合は、土葬して盛り土の上に棒を立ててニワトリを供犠するだけである。祭司のニブの墓は、三角形の櫓ではなく、竹の棒を並行して複数建てる。竹の棒は 14 本以上が決まりで 20 本が最上とされ、多ければ偉大なニブであったことの証になる。竹の棒に



写真 9 ミトゥン牛の頭蓋骨を祀る墓

出典：筆者撮影

は笹の葉を垂らす、もし別の竹の笹の葉とからめば、竹の棒の奉納者はニブになるとされる。権力者の墓も土葬であるが、近年では従来の自然に朽ちてなくなる竹作りの櫓ではなく、石造記念碑を建てて、名前や業績、役職名などを刻む。ただし、ミトゥン牛の角はしっかり取り付けていて伝統的な風習は守る。ミトゥン牛は大事な家畜で、各家を訪問すると家の壁にミトゥン牛の角が飾られているが、1月にムルン (Murung) と呼ばれる家族の願掛けの大規模な祭祀 [Blackburn 2010: 81-128] で供犠した時の記念である。ムルンは個人の祈願であるが、村全体に関わる 3 月の春迎えの祭のミョウコウ、6 月の収穫祭のドレー (Dree) と共にアパタニ族の重要な祭である。

8 病気直しの儀礼

アパタニ族の集落の外には、病気直しの儀礼を行う特別な場所があり、病気になると、祭司のニブがその場に呼ばれ、笹竹で祭壇を作り供物を捧げて、呪文を唱えて病気の快復を願う (写真 10)。ニワトリや山羊や犬を供犠して神霊に捧げる。犬の供犠は悪霊 (igii) に捧げるものと言う。儀礼の終了後、解体したニワトリの肝臓をみて神意に叶ったかどうかを、祟りや障りを及ぼしている神霊は何かを判断する。生卵を捧げ、割って形状で占いに使う。

障りをしている特定の神霊がわかると、その形を表わす切紙を作って祀ることもある。形状は神霊に応じて異なる。切紙の種類は豊富で、神霊だけでなく、家の模型、背負い籠、弓と矢、ナイフ、魚籠など、日常生活で使う物が作られて祈願が託される。生活世界の至る所に神霊が宿る。供犠した後はそばにある調理場で焼いて料理をして食べて後に残さない。この時に出る煙や匂いが神霊を喜ばせるという。儀礼の場は村ごとにきまっていて、田圃のあぜ道や森の脇などが選ばれる。境界の場の儀礼である。



写真 10 病気直しの儀礼

出典：筆者撮影

9 ズィロ盆地の風景

アパタニ族の春は盆地の各所に辛夷が咲き乱れ、菜の花も盛りである。田圃には水が張られて耕作の準備が整い、立派な穀物倉が鼠の害を防ぐために水上や村外れに造られている。耕作は水稻が主体だが、シコクビエも栽培されている。農作業の主役は女性で、種撒き、田植、除草、収穫を行い、家では、料理、野菜作り、水汲み、米搗き、掃除、洗濯、子どもの世話の全てを行う。男性は儀礼や社交、村の政治に明け暮れる。

里に近い森（myodi）には竹林が豊富で村が共同で管理し、各家の竹の生垣が見事である。竹は日常用具にも加工され、豊かな竹の文化が維持されている。所々に大麻も生えているが、麻薬には加工しない。村には一つずつ聖なる森があり、その中の椎の木や松の木が神聖視される。森の樹木は祭司の共有林なので、一般の人の伐採は許されていない。森は祭司によって守られており、勝手に伐採することは許されない。ムダン・タゲの場合は、トゥル・ディペ（turu dipe）という「鉄の斧」を祀る森があり、ミョウコウ祭の一日目にクランの代表者がきて、ニワトリを供犠する祭を行う。「鉄の斧」は先住民が使っていたという伝承もある。ミョウコウ祭は、村相互の交流が基本であるが、各村のクランでも第 1 日目には儀礼を行うのであり、各所にある巨石も祭場である。ミチ・バミンの背後にある二子山は村の守り神とされ、西側の山上に女陰状の石があり崇拝されている。東側の山は蹴飛ばされて低くなり崇拝の対象でなくなったと伝える。樹木や石の信仰はアパタニ族の根底にある。ミョウコウ祭は、20 日目以降に、田圃、森、岩、水源を祀って神送りをする¹¹⁾。自然の中に神霊の力が充満しており、祭の後は「元の場所」に帰っていくのである。

11) 祭は、30 日目の 4 月 19 日の朝のエンピ・コンヌン（Empi Konūn）の儀礼まで続く。



写真 11 ドニポロの教会ネッロ

出典：筆者撮影



写真 12 ニシ族の男性の帽子

出典：筆者撮影

10 新しい信仰の興隆と変化

アパタニ族は大きな変化に直面している。印象的だったのはドニポロ（Donyi Polo）と呼ばれる新宗教が急激に盛んになってきたことである。ドニとは太陽、ポロは月の意味である。アパタニ族は文字を持たず、口頭伝承で神話・歴史・慣習・祭祀などを伝えてきたが、祭司が老齢化して継承が難しくなってきた。そこで、新しい動きとして、部族の伝統を伝えていくために、知識を収集して、文字で書き表して体系化して教義書にまとめ、神霊を讃える歌謡集を作成し、ネッロ（Nello）という教会に類似した祭場を創設して、内部に太陽や月を最高神として崇拝する祭壇を作って拝む（写真 11）。太陽と月は真実や正義を司る神霊で、自然の象徴でもある。岩・石・樹木にも神霊が宿ると考える。ネッロの壁面には、高床式家屋、ミョウコウ祭の風景、集会場のラパン、柱のボボ、ミトゥン牛など彼等のかつての伝統的な暮らしを代表するものが描かれて理想的な生活とされていた。一種の復興運動である。毎週の日曜日や創設記念日には信者がネッロに集まって、祭司に従って書物を朗読し、歌を歌い、終了後には聖水が振り撒かれる。儀礼はキリスト教会のミサに倣う形式で進行する。聖書と讃美歌に当たるものも作り出された¹²⁾。2000 年代半ばにネッロが急速に創建され多くの女性信者を集めている。象徴となるのは太陽を表す旗で、ミョウコウ祭で建てられる柱（bobo）にドニポロの旗が取り付けられていた。最近の現象だという。ドニポロは元々はアディ族（Adi）のタロム・ルクボ（Talom Rukbo）が 1986 年に始めた [Chaudhuri 2013]。教会はアディ族ではドリポ（Doripo）、ガロ族（Galo）はガンギン（Gangin）、ニシ族（Nyishi）はナムロ（Namlo）、アパタニ族はネッロ（Nello）という。アパタニ族が住むジロでの最初の布教は 2006 年、最初のネッロの建設は 2008 年だという。

イタナガル在住のトニー・コユ（Tony Koyu、ガロ族）は、代表的な布教者で、2000 年に

12) この地域ではキリスト教の布教は禁止されているが、移民の増加もあって、カトリックやプロテスタントの教会がジロにもあり、信者は 1000 人という。

神からの啓示で得たタニ・リビ (Tani Libi) という独自の文字を使ったテキストを使用し、タニ (Tani) 系の多くの部族に共通する文字にしようとしている [脇田 2019: 364-370]。タニはこの地域の部族の共通の先祖で「人間」の意味、リビは文字の意味のヒンディー語である。毎週日曜日にトニー氏の自宅にある教会には 100 人を超える人が集まるという。伝統的な信仰を「宗教」に格上げし、「教義書」(LYANTOPE Pyakuñ Pere, 2006) をつくって儀礼を整備して、「讃歌集」(LYANTOPE Garyu Niniñ) によって祈願する形態が急速に普及しつつある。アパタニ族のドニポロの動きは、新宗教胎動の現場そのものである。

11 隣接する部族

アパタニ族と隣接して住み、常に争ってきたのがニシ族 (Nishi) である。ズィロからイタナガルへの帰途に、ニシ族の村、タロ (Taro) に寄って部族間の現状について聞いた。ニシは元々はダフラ (Dafla) と呼ばれていたが、略奪民という蔑称なので、近年は「人間」を意味する自称のニシが使われている。ハイメンドルフの報告では 1944 年当時、ダフラが他の部族を襲撃し生け捕りにして奴隷としていた壮絶な状況が描かれ、タロでは交渉が決裂したことが記録されている [フューラー・ハイメンドルフ 1970: 407-421]。当時は、相手の手を切断して祭壇に捧げ、戦勝の祝いの踊りを行った。ミョウコウ祭でもかつては踊られていた。ニシ族はアパタニ族と異なり、山地に住んで、焼畑や棚田の水田で農業を営み、狩猟も盛んで勇猛果敢であった。ニシの男性指導者は籐製の帽子にホーンビル (hornbill 犀鳥) の羽根をつけていて立派である (写真 12)。一夫多妻の習俗があり、少なくとも二人の妻を持ち、10 人の妻を持つ者もいた。社会的な位置を誇示することと、労働力の確保が目的であった。高床式のロングハウスに住み、妻たちは各自の炊事用の囲炉裏を持ち、炉端が間仕切りになっていて、10 の囲炉裏があれば 10 人の妻がいることになる。タロで訪問した家には 7 つの囲炉裏があった。ただし、現在はキリスト教への改宗が進み、一夫多妻は少なくなり、子供の教育のために多くの妻は町にある別宅に泊まり、夫とは別居することも増えてきた。ニシ族は、アパタニと隣接して生活しているにも拘わらず、独自の伝統を維持しており、部族の文化の多様性の一端を垣間見ることになった。

参 考 文 献

鈴木正崇

2004 「首狩りからツーリズムへ——ナガランドの現在」『インド考古研究』25: 41-70.

フューラー・ハイメンドルフ, C. フォン

1970 「ヒマラヤの蛮族」常盤新平 (訳) 『未開の土地の部族』川喜田二郎 (編), 365-509 ペー

ジ，文藝春秋.

Apunigyabyo Generation Society ed.

2019 *Ziro Panorama* (Adv.T.N.Gambo), Ziro: Apunigyabyo Generation Society.

Blackburn, Stuart

2010 *The Sun Rises: A Shaman's Chant, Ritual Exchange and Fertility in the Apatani Valley*, Leiden/Boston: Brill.

Bower, U.G.

1953 *The Hidden Land*, London: John Murry

Chaudhuri

2013 The Institutionalization of Tribal Religion, *Asian Ethnology* 72(2)

Fürer-Haimendorf, Christoph von

1955 *Himalayan Barbary*, London: John Murray

1962 *The Apatanis and their Neighbours: A Primitive Civilization of the Eastern Himalayas*, London: Routledge & K. Paul (Societies of the World).

1980 *A Himalayan Tribe: From Cattle to Cash*, New Delhi: Vikas Publishing House.

Mihin Kaning

2008 *The Rising Culture of the Apatanis Tribe*, Itanagar: M/s B.D. Distributors & Book Sellers.

脇田道子

2019 『モンパ——インド・ブータン国境の民』法蔵館.